OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上野修教授　功績調書
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2017, 48, p. 12-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上野修教授　功績調書

上野修教授は、1976 年 3 月国際基督教大学教養学部卒業、同年 4 月大阪大学大学院文学研究科博士前期課程（哲学哲学史）入学、1979 年 3 月同課程修了、同年 4 月同後期課程進学、1984 年 3 月同課程を単位修得退学、1985 年 11 月パリ第一大学（Panthéon-Sorbonne）哲学科博士課程入学（フランス政府給費留学）、1986 年 3 月同中途退学。1986 年 4 月大阪大学文学部助手に就任、1990 年 10 月山口大学教養部助教授、1996 年 10 月山口大学人文学部助教授、1997 年 4 月同教授を経て、2004 年 4 月大阪大学大学院文学研究科教授に着任した。以後大学院文学研究科の発展に尽力し、2017 年 3 月 31 日限り定年退職するものである。

同教授は、長年にわたってスピノザ哲学を中心に 17 世紀の哲学の研究に取り組み、多くの著作を出版し、また非常に多くの論文を発表し、多くの口頭発表を行ってきた。最初の単著『精神の眼は論証そのもの』（1999 年）（これはのちに、改題されて『デカルト、ホッブズ、スピノザ――哲学する 17 世紀』（2011 年）として文庫本になった。）では、ホッブズとスピノザの契約論について「残りの者」という概念に注目した画期的な解釈を行い、またデカルトの物体概念、スピノザの実体概念、スピノザの『エチカ』の論証方法について明確な解釈を提示した。次の著作『スピノザの世界――神あるいは自然』（2005 年）では、スピノザの主著である『エチカ』の主要テーマである、真理、神、人間に関する存在論と、自由意志と神への愛に関わる倫理について論じ、スピノザ『エチカ』の全体像について明快な解釈を提示した。さらに『スピノザ――「無神論者」は宗教を肯定できるか』（2006 年）とこれの増補版である『スピノザ『神学政治論』を読む』（2014 年）では、無神論者であるスピノザが宗教を擁護しているようにみえる読解の困難な『神学政治論』について、その難解さを単純化することなく、丁寧に解剖するとともに、アルチュセールやネグリなどの現代のスピノザ論に言及しながら、スピノザのアクチュアリティを示した。最近の仕事『哲学者たちのワンダーランド――様相の 17 世紀』（2013 年）は、デカルト、ホッブズ、スピノザの研究に加えて、ライプニッツにも研究の幅を広げて、その様相論に光を当てた大きな仕事である。イギリス経験論では認識論が中心であり、大陸合理論では存在論ないし形而上学が中心であったので、それを論じる時に様相概念に注目することが的確なアプローチであることを、同教授はこの書物で説得的に示した。

同教授は、これらの単独の研究に加えて、広範な時代と領域にわたる研究者たちに呼びかけて二度にわたり共同研究を主宰して、西洋哲学史におけるスピノザの影響史を明らかにしてきた。また同教授は、スピノザ研究と並行して、ラカン、ドゥルーズ、アンリ、ネグリなど現代フランス哲学の研究でも注目される貢献をしてきた。

同教授のこのような功績が、哲学の専門研究における功績にとどまらず、その魅力的な文体によって、スピノザ哲学の魅力、あるいはホッブズ、デカルト、ライプニッツを含む 17 世紀の合理主義の哲学の魅力を多くの人に再認識させることになったことを付け加えなければならない。近年イギリス経験論の哲学は、英米系の分析哲学との関係で言及されることが多いのだが、それに比べて、学界ではともかく、一般読者には注目されることが少なくなっている大陸合理論の哲

学の魅力に人々の目を向けさせた点は、同教授の大きな功績である。

同教授の下には、スピノザ、デカルト、ライプニッツを研究する院生が全国から集まり、彼らに対する懇切な指導によって同教授は優秀な研究者を育ててきた。また学会活動においても、日本哲学会評議員、日仏哲学会理事、関西哲学会委員、西日本哲学会評議員、スピノザ協会運営委員、日本ライプニッツ協会理事、などの役員を長く務め、大きな貢献を行ってきた。また、日本学術振興会の特別研究員等審査会委員、科学研究費委員会奨励研究部会小委員会委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員などの業務も行ってきた。

学内では、学生生活委員、教育支援室・教務・学位関連部門チーフ、ハラスメント問題委員会副委員長、評価・広報室員、教育支援室員、国際連携室員としての業務を行ってきた。

以上のように同教授は、研究、教育、運営業務に大きな成果を上げており、ここに、大学院文学研究科教授会はその功績をたたえ、本学名誉教授候補者として推薦するものである。